

コロナ禍を経て

葬儀の形

墓の個人化

新しい価値観広まる

終活サービスを展開する榊倉新書（東京都）が2022年3月に実施した「第5回お葬式に関する全国調査」によると、行った葬儀の種類は家族葬が55・7%と過半数を超え、一般葬は25・9%となった。また、葬儀費用の総額も110・7万円で過去最安となった。その一方、家族葬を行った人のうち、コロナ禍でなければ一般葬を行いたかったという人は44%もあり、アフターコロナに突入した現在では、状況が変わっている可能性がある。

「5類に引き下げになったから急に傾向が変わったとは感じていません。今年に入ってから、少しずつ意識が薄れてきたのでは」と話すのは、冠婚葬祭の榊あいあーる（青葉区）の鈴木大介（セレモール事業部部长。23年に入ってから少しずつ意識が変わりはじめ、基本的な感染対策をしていけば、人数制限などを行わなくても気にな



鈴木大介部長

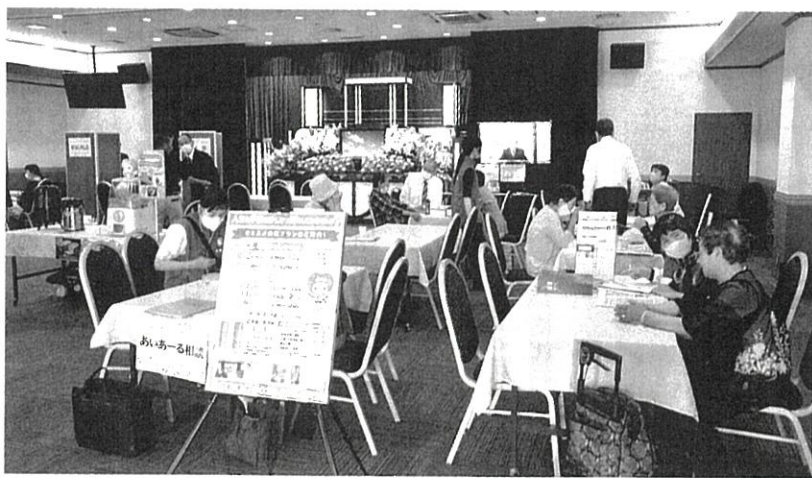
らない場合も多くなっているようだ。23年に入ってから、大規模な社葬も増えてきたという。同

会食会場を多目的用途の会場に

葬儀の傾向として、前

述のように家族葬が主流

社では新型コロナウイルスの5類移行に伴い、運営する葬祭会館において、アルコール消毒や換気などの基本的な感染対策を実施しているが、座席の間隔を空けたり、マスク着用を「協力」にするなど、対策緩和に取り組み出している。



相談会には大勢の人が訪れた

になってきているが、一般葬の需要がなくなったわけではない。家族葬の場合、身内だけで費用を抑え、コンパクトに済ますことができますという良さはありますが、故人が付き合いたった場合、後から親交のあった人たちが自宅に弔問に来ることもある。弔問客に

応しなければいけないことを考えると、一般葬あ

台頭する樹木葬

大きく変わったのは、墓に対する考え方も同様である。元来、墓は先祖代々承継するものとされてきた。しかし、ここ数

「5類に引き下げになったから急に傾向が変わったとは感じていません。今年に入ってから、少しずつ意識が薄れてきたのでは」と話すのは、冠婚葬祭の榊あいあーる（青葉区）の鈴木大介（セレモール事業部部长。23年に入ってから少しずつ意識が変わりはじめ、基本的な感染対策をしていけば、人数制限などを行わなくても気にな

年の間で、墓を子孫に承継しない「個人化」が進んでいる。「自分が入るお墓を生前に制作し、いざ自身がそのお墓に埋葬

会場がほとんど使われていないことから、家族葬を中心とした多目的用途の会場に転用することを検討している状況である。新しい取り組みも模索している。同社ではネット上で、遺族や関係者だけでなく、参列者から広く故人の思い出の写真を共有する「双方向」のサービスも試験的に実施しているほか、セレモール各会場でイベントや特典付きの「会館見学会」を実施し、多くの来場者があったという。

「これからは、いかに付加価値をつけていくかが大事。差別化を図っていかないと生き残りは厳しいでしょう」と鈴木部長は話す。

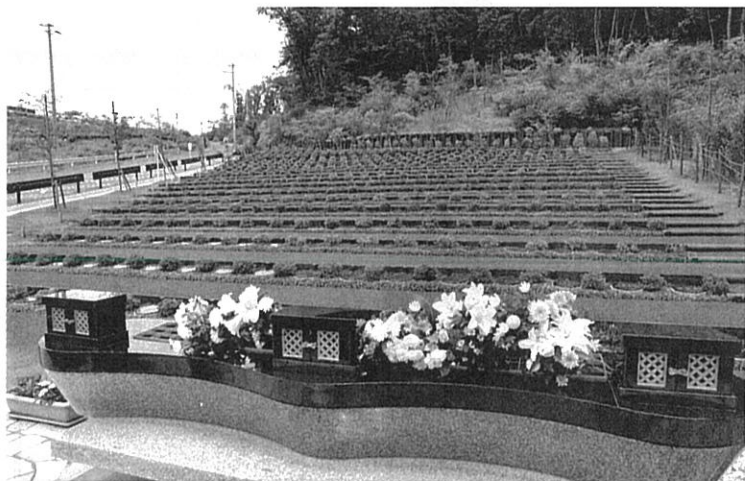
されて数十年の期間が過ぎれば、合祀墓に改葬するものです。ご夫婦や、可愛がっていたペットと一緒に埋葬を希望されるケースも増えていきます」と話すのは、（公財）アタクシアが運営する民間の霊園「みやぎ霊園」（青葉区）の遠藤洋晶所長。その背景には、①少子高齢化により墓の承継が不安である（または承



遠藤洋晶所長

継をさせたくない）②自分だけの墓をつくりたい③墓石などを設置する必要があるためコストを抑えることができる④先祖代々の墓が遠くにある——といった事情があるようだ。

を集めている。みやぎ霊園でも21年6月に樹木葬「四季の丘」の提供を開始した。全500区画で、1区画にサツキやツツジを植栽。周囲も森が隣接し、日の光が当たりやすい自然豊かな環境の中にあるため、お墓というより花壇のような雰囲気だ。献花台や焼香台も別途設けられており、墓参りも清々しい気持ちで行うことができそう。使用料は58万円（30年使用）と、一般墓の使用料の半額程度で利用できる。提供開始から2年で、既に300区画弱が埋まっているという。樹木葬の希望者が増えていることから、みやぎ霊園では区画を増やすことも検討している。



みやぎ霊園の樹木葬

その「非承継型」の墓地の中でも注目を集めているのが、「樹木葬」だ。墓石の代わり樹木を墓碑としたり、草花を植えたりすることで、自然と共生する形態の埋葬方法であり、人気

ライフスタイル